

第二十回記念号に寄せて

古田島洋介

本誌も節目の第二十号を迎へるに至つた。第一〇十八号は「青梅校」日本文化学部言語文化学科として、第十九、二十号は「日野校」人文学部日本文化学科としての発刊である。平成五年（一九九三）三月刊行の第一号より足かけ二十年、謂はば成人の域に達したわけだ。毎年度末一回の刊行を順調にこなしてきたことを、まづは関係各位とともに喜びたい。

第一号から健筆を揮つた佐佐木茂美先生・島田良二先生・田中敏先生・和田正美先生はすでに定年を迎へ、常に自ら範となつて学術研究にいそしむ雰囲気や学科に醸成した井上英明先生・小堀桂一郎先生も勇退した。本誌への寄稿こそかなはなかつたものの、第一線の翻訳家として学科の趣旨を体現してゐた観のある矢野浩三郎先生の姿も今はない。

その間、新たに柴田雅生・田村良平、次いで服部裕・三橋正が加はり、近年は上原麻有子・勝又基をはじめとして、前田雅之・青山英正・内海敦子といふ新たな面々も学科教員に名を列ね、旧に変はらず充実した誌面を提供できてゐることは慶賀に勝へぬ。最年少の教員として第一号から数年にわたり編集委員を務めた私が今や学科で最古参の身になつてしまつたのだから、二十年の時の流れは悔りがたいものである。

もつとも、井上・小堀両先生が率先して築いた「自らの研究を基盤として授業を行ふ」雰囲気は今なほ不変、将来にわたつても堅持すべき方

針と思ふ。昨今は大学教員も何かにつけて多忙を極め、教育の美名に隠れて研究に手を抜く向きが、あるいは手を抜かざるを得ない向きが少なくないと思ふ。しかし、研究に力を注ぐことなく行ふ大学教育とは、そもそも何ぞや。他者の研究成果を小器用に切り貼りした collage ならぬ「ごつた煮」もどきが、果たして大学において授業と称するに値するだらうか。しかも、茲に謂ふ切り貼りとは、決して比喩にとどまらず、事実そのものである虞すら無しとしない。すなはち、他人の手に成る研究書やら注釈書やらを得たり賢しとばかりに複写し、摘み食ひよろしく必要箇所を録と糊で台紙に貼り付けて、「本日の教材、一丁上がり」。かうした教材の横行こそ、現今の大学における授業の実情ではないのか。その種の教材作成を常とする教員が学生たちの所謂「コピペ」レポートを嘆いてゐるとすれば、笑ふに笑へぬ滑稽譚であらう。大学に身を置く研究者の集団が志の低い学科に成り下がつてはならない。他無し、本誌は研究を教育の基盤とする教員のための前進基地なのである。

創刊当初から、近接分野の〈一般教育〉担当教員、すなはち現在に謂ふところの〈全学共通教育〉担当教員も本誌の執筆に加はつてきた。第一号以来の目次を気ままに見渡すだけでも、日本の絵巻物の表現手法あり、フランス文学と音楽との関係あり、中国語の文法の英語化問題あり、チベット族の宗教社会事情あり、はたまた「東京裁判」問題もあれば、オーストラリアの戦争文学もあり、広く社会経済学にわたつての文明論まであるといふ具合。雑多と言へば雑多でこそあれ、本誌が種々の話柄にわたる内容を提供し得てきた理由の一は、文字どほり執筆者たちの多彩な顔ぶれにあらう。非常勤講師にも誌面が開放されてゐる紀要は、なかなか珍しい存在なのではないか。

今後とも、研究成果を存分に発表できる場として本誌が継続すること

を願つて已まない。本誌への執筆を足がかりに、各教員が充実した著書を陸続と世に問はんことを希ふ。それこそが密室の営為たる授業の品質を保証せんがための紛ふ方なき説明責任なのである。